

## 感謝の気持ちを見つけるまで

### 小さい頃

私は、1992年7月20日に生まれた。今でも記憶に残る幼少時代の記憶は、お父さん子で、友達と遊ぶより、お父さんと遊ぶ方が好きだったということだ。幼馴染はみんな男の子で、リカちゃん人形やおままごとよりも、自転車やかけっこなどをして遊ぶことが多かった。幼いころからバレエを習っていて、バレリーナになるのが夢だった。友達もたくさんいた。末っ子だったこともあり、小さいころからわがままで、こだわりの強い子供だったという。何も悪いことなどなかった。とても幸せな生活だったと思う。

### 転校したことがきっかけ

そんな私に変化が起き始めたのは、小学五年生のときだった。引越して、学校を転入した。周りも中学生の子たちに憧れ、真似をしたがりおしゃべりしたり、携帯を持ち始めたり、背伸びし始める思春期に入り始めたときに、転入したこともあり、学校の空気になじむのが大変だった。別に、友達ができなかった訳ではない。いじめられたわけでもない。でも、男の子とばかり遊んでいた私にとって、いちいち人の目を気にして何か陰口を

たたかれるのではないかとびくびくしたり、グループ内でリーダーがいて、なんでもその子中心に回っていき、その仲よしグループの内では必ず一人はいつもハバにされているような（女の世界）を、理解するのは大変だった。

なんとかしがみつこうと必死だった。嫌われたくなかった。私は、小さいころから臆病者の目立ちたがり屋だったから、クラスの中で一番目立っているだろうグループにいたかったんだと思う。

前の学校ときは、幼稚園からの関係があったから、なにも心配することなどなかった。喧嘩しても、次の日には仲直りできた。毎日友達と一緒にいた。でも、転入先の学校は違った。だから、本当に必死だったのだ。学校でのストレスは家で発散するようになった。「なんでこんなところ引越してきたの」、「ここにいるのは全部お父さんたちのせいだ」。自分の状況に向き合う勇気がなくて、そんなふうになんか責任転嫁をしていた。それは、次第に親に直接言うようになっていった。

### 反抗期

中学に上がり、私は友達と一緒にハンドボール部に入った。その部活はまさに（女の世界）だった。やはり、そこにも女の中のリーダーがいて常に誰か一人が嫌われ者だった。その嫌われる理由も、嫌われる期間も全てそのリーダーの気分次第。その世界の中にいた私は、自分が嫌われるのが嫌で怖くて、リーダーの子に必死について回っていた。嫌われている子のことを見て、心の

中では助けたい気持ちでいっぱいなのに、行動に移すのが怖かったのだ。その中でしか自分は学校生活を送って行けないような気がしていた。どこかで、そのリーダーの子にマインドコントロールのようなものをされていたのかもしれない。

そんな中で生活しているうちに、私の反抗期は更に悪化した。人には絶対に言うてはいけない言葉を、よりにもよって家族に投げかけ、場合によっては手も出した。何か少しでも私生活の乱れに対して、「少しは勉強しなさい」、「いつからそんな言葉使いになったの」などと親に怒られたり、口を出されるだけでイライラして、「うるせんだよ、話しかけんな」とか、「佳奈が決めることだから関係ないじゃん、口出ししんで」などと言いつ返し、反抗を繰り返した。お母さんとは毎日つかみ合いの喧嘩だった。たくさん喧嘩をしたが、内容は本当に小さなことばかりで何が原因だったかなんて覚えていないくらいだ。

ただ、今でも覚えているお父さんの言葉は、「なんでそんなひどいことを言えるんだ。お父さんだつて人間なんだぞ」と、とても悲しそうな顔で言われたこと。お母さんには、「一度言ったことは消しゴムでは消せない。人を傷つけた言葉は一生その人の心の中で生き続けるんだよ」と泣きながら言われたこと。

なんで大切な親にそんなことを言わせるまで荒れてしまったか、そう聞かれると定まった原因は思いつかない。だが一つ言えることは、私の精神が人よりもだいたい不安定だったことだと思う。少し嫌なことがあると、すぐ自分の殻に閉じこもり、世界中でこんな思いをしているのは自分だけだと思いきんでいた。と

ても、自分勝手な考え方で、すべて自分の責任なのだ。

### 居場所をもとめて

中学二年生になり、私は2人目の彼氏ができた。中学の中で一番やんちゃな男の子だった。髪は茶髪で、制服はズボンを腰ばきにして、学ランのボタンは全て開けて。着崩し、タバコを吸って、バイクで登校しているときもあった。そういった生活を私も真似するようになり、次第にバレエのレッスンにも行かず、部活にも行かなくなり、毎日その男の子と一緒にいた。

その子といることが自分の幸せであり、自分の居場所だと思った。友達といるより気を使わないし、家にいるより楽だった。授業にも出なくなり、お母さんはいつも泣いていた。「こんな風になつたのは全部親のせいだ」と思う自分の半面、「こんなことしたいわけじゃない、お母さんやお父さんが嫌いなわけじゃない、大好きなのに。こんな娘で本当にごめんね」と思っている自分がいた。

だが、そんなことを素直に言える訳もなく、親を傷つけ続ける自分を止められなかった。止め方が分からなかった。自分のことを理解できていなかったのだ。あのときは、こんな自分のことを受け入れて、好きになってくれる彼氏の存在が支えだったのだと思う。それが、どんな相手でもよかつたのだ。安定した居場所がほしかった。

### 高校進学之梦

中学3年生になり、受験の歳になった。友達に誘われ、ノリで入った学習塾で、私は少しいい方向へ変わった気がする。それまで、1と2と3しかなかった成績表を見て、危機感を感じた。受験して、楽しい高校生活が送れなくなるのは「ごめん」だった。

まだまだ反抗期で最低な娘だった私に親は、「佳奈が頑張るならお母さんたち応援するよ」と言ってくれた。嬉しかった。なのに、「ありがとう」と言えなかった。まだ、見放されていないんだと思い、彼氏と遊ぶ時間も減らし、必死で勉強をした。朝は、登校時間より1時間早く起きて勉強をし、登校中も参考書を見て、学校が終わったらそのまま塾へ行き、夜まで勉強していた。

何がそんなやる気にさせたかというところ、成績がとて悪く、行く高校さえほとんどないと言われた私にとつて、高校へ行くのは夢だったからだ。そしてなにより、誰かに認めて欲しかった。もつと確立した自分の居場所がほしかった。心のどこかで生まれ変わりたいかっただと思ふ。

そのためなら勉強の他にもできることはなんでもした。短く切ったスカートは丈の長いものを買直し、薄く剃ったまゆげは伸ばして、嫌いな先生にも媚を売った。そして、私は見事行きかけた高校の推薦をもらえたのだ。大好きな友達と二人で受かった。中学の卒業式はほとんど記憶が無い。よっぽど、あの毎日いっつも嫌われるのか、いつ仲間はすれにされるのか気を使って、びくびくしていた自分が嫌いだったのだろう。

### 自暴自棄だった私

高校の入学式、私はとても緊張していた。誰よりも目立とうとして、制服のスカートはできる限り短く履いて、髪はエクステをつけ、慣れない化粧もしていた。

高校は一瞬で好きになった。なにがあつたという訳ではない。でも、その平和な感じが好きだった。見た目は派手な子が多かったけど、中身は本当にみんな優しく、人の悪口を言ったり、誰かをハバにしたりする子なんていなかった。そして、親への反抗も和らぎつつあつた。高校の友達の優しさや温かさに触れることで、少しずつ親への感謝の念や親に対して、もつと大切にしながら、優しくしなきゃという気持ちが膨らんでいったのだと思ふ。

高校に入り、中学の頃の彼氏とはすぐに別れ、私は同じクラスの子と付き合つた。今思うと、中学の頃の彼は好きではなかったのだろう。学校で一番やんちゃな男の子に好かれている自分が好きだった。だが逆に、高校のときに付き合っていた彼氏のことを、私は好きにならずにしまった。その子がいないと、なにも手につかなかった。

お互い束縛し合い、すがつていた。その人が私の全てだと思つていた。少し何かあつただけで、友達に泣きついてた。離れるなんて考えられなくて、ずっとそばにいてほしかった。お互いがお互いを求めあひすぎでいて、その人とは10か月で別れてしまった。受け入れられなかった。逃げだしたくて、そのあとすぐに一番仲の良かった男友達と付き合ってしまった。

その人はいつも優しく、私のそばにいてくれた。そんな人を私は利用して傷つけた。そんな自分にうんざりした。どん底だった。もうなにもかも忘れたいと思つたこともあつた。大好きだった人を失つたという寂しさから逃れたくて、私は自暴自棄になつていった。ある程度かっこいいと思えば誰とでも付き合つた。この人なら忘れさせてくれるかもしれない。そう思つて、付き合つては別れて、を繰り返していた。

友達には毎日のように怒られた。「なんで佳奈はそんなに弱いのもつと強くなりやあ」、「強くなるつてなに？ どうすれば強くなれるの。なんで誰も私の辛さをわかってくれないの。どうしたら忘れられるの。だれか助けて」。そんなことばかり考えていた。悲劇のヒロインになりきっていた。

そんな私のそばにいて、怒りながらも理解してくれた友達には今でも本当に感謝の気持ちでいっぱいだ。そんな毎日を通じて、高校三年生になり、また受験の歳になつた。またまた1と2と3しかなかった成績表を見て危機感を感じ、猛勉強を始めた。でも、その猛勉強というものは高校三年生の冬からしかしなかつたので、正確には、猛勉強とは言わないだろう。とにかく、共学の大学に受かりたかつた。でも、共学の大学は全て落ちた。受かつたのは全部、滑り止めで受けた女子大ばかりだった。でも、今の大学に受かつたのも、高校時代の私からしたら奇跡のようなものだから、感謝した。

大学生になり夢を見つけて

大学に入り、やっぱり私は女子だけの世界に溶け込めないままにいます。大学の思い出はほとんどないに等しい。休日はほとんど高校の友達と遊んでいるし、大学には、授業を受けて帰るだけ。大学に入つても何回か恋愛はしてきたが、結局、高校のときの彼氏以上に好きになれる人はできず、もう恋愛とはしばらく距離を置いている。私がこんな気持ちである限り、私のことを心から受け入れてくれて、好きになつてくれる人なんてできないと気づいたからだ。

今は、これまでの自分にも、周りにもだらしなかつた自分とも決別したい。今のままじゃいけない。なにより自分と向き合う時間が必要だと思ひ、アパレルのバイトを始め、たまの休日は友達と遊んだり、勉強をしたり、家族とすごしたりして、充実した毎日を送っている。

家族には、今までの私の行動で、迷惑や苦勞を沢山かけてきたので、少しでも親孝行をしていきたいと思ひ、あいてる時間があれば家族で食事をしたり、旅行に出かけたり、家の手伝いもできる範囲やつている。そんな生活を送っているうちに、夢を見つけることもできた。私は昔からファッションが大好きで、おしゃれを研究するのが何よりも好きなので、アパレル関係の広報や広告関係、マーケティング、雑誌の編集。そう言ったものに関する仕事に就きたいと思ふことができた。

全ての経験や出会いに感謝の気持ちを忘れないこと

今までは、家族や友達、彼氏、何かにつけて自分自身の問題

を誰かに押しつけていた私が、やっと自分と向き合うことができようになるまで来た。それは私の今までの経験や人間関係、様々なものとの出会いと家族の支えのおかげだ。何か一つでも欠けていたら、今の私にはなれなかったし、悪いこともいいことも全て経験しなければならなかったことだと思う。

これまでの私は、「なんでこんな目にあわないといけないんだろう」、「なんで誰も私を理解してくれないんだろう」と思っていたが、それは間違いだった。「こんな経験をさせてくれてありがとう」、「私を成長させるために叱ってくれてありがとう」と思わなきゃいけないのだと思う。そして、友達の言う、「強い」という言葉の意味がわからなかった私も、最近その意味がわかってきたような気がする。

それは、いつも笑顔でポジティブでいること。自分のことで精いつばいにならずに、周りの人への優しさを忘れない人になること。どんな状況になっても解決の道を探し、今の自分は幸せだと胸を張って言えるようになること。そんな人になつてほしいと思つて、私の友達は、「強くなりやあ」と声をかけてくれたのではないかと思う。

正しい選択ができなくても、恥じることはない。きっとそれは自分で正しい方向へ変えていけるから。ただ、選択することから逃げてはいけない。人に認めてもらいたければ、まずは、自分が自分を認めてあげなければならぬ。自分に恥じる人生だけは送りたくないと思う。嫌なことや辛いことがあっても、決して人のせいや環境のせいにしてはいけない。それは自分にとって大切

な感謝すべき試練であり、教訓である。一つ一つの出来事に意味があり、学ぶべきものがある。楽しいことや嬉しいことがあるれば、感謝の気持ちを覚え、次は自分が誰かに与えられるようになる。

私はまだまだ成長の過程だが、今の私は感謝の気持ちと経験からの教訓でできている。一人一人、違う毎日をすごしているからこそ個性ができ、優しさが生まれる。その優しさを知らぬうちに誰かに供給していて、知らぬうちに人はその優しさを受け取っている。経験から生まれる優しさのバトンに、これからも感謝して毎日を過ごしていきたいと思う。

一番大切なことは、全ての経験や出会いに感謝の気持ちを忘れないこと。それはすべて、一人一人の自分らしきとなっていくのだから。